

# 琉球大学学術リポジトリ

## 教材研究 「舞踏会」 (芥川龍之介)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5639">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5639</a>

## 教材研究「舞踏会」(芥川龍之介)

小澤保博\*

### The Study of Teaching Materials on R, Akutagawa's BUTOUKAI

Yasuhiro OZAWA

(上)  
第一創作集「羅生門」(「阿蘭陀書房」大正6年5月)の題辞に掲げた五言対句は「君看双眼色 不語似無愁」(禅林句集)であるが、このエピグラムほどに作品「舞踏会」の世界を、芥川龍之介の文学世界を言い尽くした言葉はない。作品「舞踏会」は、あらゆる意味で作品背後に哀しみを、あるいは作者自身の哀しみをも秘めた文学世界である。

「美しい音楽的な短編小説。芥川のもつてある最も善いもの、しかも芥川自身の軽んじてゐたものが、この短編に結晶してゐるやうな感じがする。それは軽やかさと若々しさとうひうひしい感傷とである。時代思潮に毒された擬似哲学的憂鬱ではなくて、青春の只中に自然に洩れる死の溜息のやうなものである。この短編のクライマックスで、ロティが花火を見て呟く一言は美しい。実に音楽的な、一閃して消えるやうな、生の、又、死のモチーフ。

この小説の中に一寸ワットオのことが出てくるが、芥川は本質的にワットオ的な才能だつたのだと思ふ。」(三島由紀夫「南京の基督」解説)

作品「舞踏会」の優美な作品世界を垣間見る

以前に、優雅な作品世界を背後で支えている作者の側の創作事情、あるいは素材の問題について考察しておきたい。「海軍士官の話を書きつづける。間歇的にくるYのmemoryに圧倒される。」(「手帳」大正5年1月26日)、作品「舞踏会」(「新潮」大正9年1月)

両者を引き比べてみると、四年間の時間のずれがある。「舞踏会」未定稿は存在しないが、素案となった覚書が、大正5年前後に執筆された事実があるのか、あるいは芥川全集編纂の折に「手帳」の記述が、「1月26日」(大正5年)の日付の記述の中に紛れ込んだか。いずれにしても「海軍士官の話」というのは、「舞踏会」のことであろうし、この時期に芥川作品に海軍士官の話は、「舞踏会」以外にないことを考えると研究史上何らかの錯誤が有るかもしれない。ちなみに「Yのmemoryに圧倒される」の対象である初恋の人吉田弥生の結婚相手は、海軍士官ではなくて陸軍士官である。この辺にも芥川の情報不足があったか、あるいは海軍士官の話から陸軍士官と結婚した吉田弥生に連想が動いたかかもしれない。

初恋の人吉田弥生との恋の破局からくる精神

\* 琉球大学教育学部

的打撃を直接的に反映した「羅生門」（「帝国文学」大正4年11月）から、初恋の人への恋情を覚めた視線で冷笑によって再構成した「開化の殺人」（「中央公論」大正7年7月）「袈裟と盛遠」（「中央公論」大正7年4月）「開化の夫」（「中外」大正8年2月）そしてこれらの明治開化小説の一環として「舞踏会」（「新潮」大正9年1月）の創作がなされた。この優美な音楽的な調べの中に一抹の憂愁を帯びた作品が完成されるためには、結婚後に芥川に訪れた一つの出会いについて知っておくと良い。

「我鬼窟日録」（大正8年）の記録から秀しげ子との出会いを拾ってみると以下のようになる。「それから十日会へ行く。（中略）外に岩野夫人等の女性四五人あり。」（6月10日）「夕方から十日会へ行く。夜眠られず。起きてクロオチエがユステイクを読む。」（9月10日）

「雨声繞蔕。尽日枯座。愁人亦この雨を聞くべしなどと思ふ。」（9月12日）「後始めて愁人と会す。夜に入って帰る。心緒乱れて止まず。自ら悲喜を知らざるなり。」（9月15日）

「不忍池の夜色愁人を憶はしむる事切なり。」（9月17日）「無月秋風。（中略）頗に愁人を憶ふ。」（9月22日）「愁人と再会す。夜帰。失ふ所ある如き心地なり。ここに於て心重しも硯屏の青磁の花に見入りたるかも。数年来初めて歌興あり。自ら驚く。」（9月25日）

岩野泡鳴主催の「十日会」に菊池寛と共に出席して「愁人」と呼ぶことになる秀しげ子と接触を持ったことである。（「我鬼窟日録」大正8年6月10日）、さらに一ヶ月前に菊池寛と共に十日間ほど長崎に滞在して異国趣味を満喫したことである。この二つの出来事により芥川の内部で作品「舞踏会」は、過去の「開化の殺人」「開化の夫」に描かれた屈折した恋情を取捨する形でピエール・ロチの「秋の日本」（「江戸の舞踏会」角川文庫）を再構成する形で短期間に執筆されたものである。

「芥川龍之介全集」（「別巻」角川書店）所収の「芥川龍之介作品年表」の記述によれば、

「舞踏会」（「新潮」大正9年1月）と同月号掲載の作品は、「舞踏会」を含めて六篇あり、他にも小品が六篇で前年度末の芥川の奮闘振りとうかがわせる。「新潮の原稿御約束しました所昨夜より急に発熱し今日猶床に就いてゐます」（「水守亀之助宛書簡」大正8年12月18日）体調不良のために原稿が締め切りに間に合わないというのは、芥川の言い訳で「新潮」編集者宛書簡は、この時期の芥川の「舞踏会」執筆に際しての苦闘振りを今日に伝えている。

「舞踏会」が「開化の殺人」や「開化の夫」と素材や舞台設定を同じくしていながら華やかな明るさを持っているのは、「愁人」と呼んだ人妻との交渉でこの時期の芥川に何か華やかなものがあつたからであろう。初恋の人吉田弥生との別離の苦痛を直接反映した作品「開化の殺人」と比べて「舞踏会」の作品構図が華やかなのは、芥川の意図的な創作手法による。前掲の「禅林句集」の五言対句が、再び思い出される。

このことは「秋の日本」（「江戸の舞踏会」）の撰取の仕方にも見て取れる。「江戸の舞踏会」の舞台設定を借りることで作品「舞踏会」を創作した芥川の手法そのものに見るべきものがある。

「開化の殺人」「開化の夫」「舞踏会」の開化小説三部作を連関小説として把握した中村真一郎「芥川龍之介近代文学館」の解説は、示唆に富んでいて刺激的である。しかし「開化の殺人」から「舞踏会」創作の短い期間に芥川の側に微妙な変化があつた。このことが両作品との間に溝を作つた。しかし「舞踏会」は「開化の殺人」の内部に描かれた華やかな側面を芥川の若い弾む心で拡大して描いて見せたとも言える。

「彼女は左手を垂れて左のあしゆびを握り、右手を挙げて均衡を保ちつつ、双脚にて立つ事、これを久しゅうしたりき。頭上の紫藤は春日の光を揺り手垂れ、藤下の明子は凝然として彫塑の如く佇めり。余はこの画の如き数

分の彼女を、今に至って忘るる能わず。(中略) 英吉利留学の三年間、余がハイド・パークの街頭を歩いて、いかに天涯の遊子たる予自身を憫みしか、そはここに叙述するの要なかるべし。」「開化の殺人」

「開化の殺人」の主人公は、一瞬の美に心を奪われて自滅して行く。この作品構図は「舞踏会」の創作世界との繋がりを感じさせる。芥川龍之介「開化の殺人」の中に秘められた殺意は、松本清張「恋情」となって後年スリリングに展開して行く。「開化の殺人」の作品内部から殺意を除去することで、華やかな「舞踏会」の創作世界が現出し後年の「秋」の穏やかな三角関係に発展していったとも言える。前者は松本清張に影響を与えて、後者は堀辰雄の文学世界を構築するのに役立った。

「中村真一郎氏は、H 老夫人を本多老夫人と見、本多子爵、甘露寺明子が登場した『開化の殺人』『開化の夫』とこの『舞踏会』を連関小説と見ている。(中略)『舞踏会』は、他のどんなドラマも寄せつけない完結された世界であり、二章のH 老夫人の生涯に、一章に匹敵するどんなドラマも存在しなかったという条件が、『舞踏会』の作品世界を支えているのである。」(「舞踏会」神田由美子)

「舞踏会」が、一つの完結した作品世界を作っていることについて異論はない。しかしこの完結した作品世界を背後で支えている作者の側に愛を巡る切実なドラマがあり、そのことが「開化の殺人」の錯綜する殺意を生み、さらに「舞踏会」の華麗な世界を作る事にあずかっていることを知るのには意味のない事ではない。愛の対象の一瞬の喪失が、芥川に精神に与えた打撃は大きくて、生誕の地築地居留地を舞台にした「開化の殺人」「舞踏会」には作者芥川の生の声が隠されている。

「連関小説としての開化物」(「芥川龍之介近代文学館」解説、中村真一郎)に拠りながら「開化物」三作の中での「舞踏会」の側面を見ておきたい。「開化物」三作はいずれも作者を思わせる若い小説家が、本多子爵とその夫人旧

姓甘露寺明子から過ぎ去った遠い明治初年の思い出を聞くと言う設定になっている。「ある日のこと、私はやはり友人のドクトルと中村座を見物した帰り途に」(「開化の夫」)、このときに若い本多子爵と中村座で同席した友人のドクトルというのは、「開化の殺人」の作品世界に拠れば北島義一郎であり、彼は既に甘露寺明子の夫である銀行頭取満村恭平殺害の犯行の後、甘露寺明子の気持ちが自分ではなくて本多子爵に傾きつつあることを知り、本多子爵殺害の意図を持って中村座で子爵と同席していることになっている。

「開化の殺人」「開化の夫」の二作は、明らかに連関小説としての色合いを持っている。この二作を背後で支えているのは、芥川の初恋の人への喪失感である。「開化の殺人」では愛の喪失感は、錯綜する殺意となってその対象を見極めることができないでいる。次の作品「開化の夫」では、愛の倦怠が傍観者の立場で描かれている。このような連関小説二作の執筆の後で書かれた「舞踏会」では瞬間的に失われる生の喜びについて、あるいは生の歓喜の中に忍び込む死の影を主題に据えている。

「舞踏会」の華やいだ雰囲気を理解するためには、芥川がこの年に二年間に亘る海軍機関学校嘱託教官の職を辞して一ヶ月後に十日間ほど菊池寛と長崎に旅行して南蛮、切支丹、支那趣味を満喫した経験を把握しておくといよい。(彼らはこの旅行を長崎洋行と称した)

「松岡謙宛書簡」(大正8年5月15日)「南部修太郎宛書簡」(大正8年5月19日)は、芥川の港町長崎に対する愛着を今日に伝えている。田端の「我鬼窟」の扁額を掲げた書齋で半年間彼は、35年前に長崎に寄港して「お菊さん」「秋の日本」等の日本印象記を残したピエル・ロチに思いを致して自己の10日間の長崎滞在を反芻したことであろう。

「舞踏会」は、その年暮れに短期間に多忙の中に完成された。「秋の日本」(「江戸の舞踏会」)に骨組を借りながら芥川は、作品「舞

踏会」の冒頭に「戦争と平和」（「第二巻第三章十五」）の初めて舞踏会に参加するナターシャの高揚する少女の心のときめきをそのまま借用していると言う。（安田保雄「比較文学論考」学友社、昭和44年10月）この先学の説を受けて「ナターシャの不安期待を、馬車の中から舞踏会の階段へと移行させるトルストイの手法を参考として、芥川が鹿鳴館の階段を上る華やかな場面から馬車の中の明子の描写へと作品世界の時間を逆行させ、より劇的な『舞踏会』の冒頭を描写した」（神田由美子「舞踏会」国文学、昭和56年5月）と言う解説がある。

「今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上って行った。（中略）彼女は馬車が鹿鳴館の前に止まるまで、何度いらだたい眼をあげて、窓の外に流れていく東京の町の乏しい燈火を、見つめたことだか知れなかった。」（『舞踏会』）

十七歳に少女が初めて舞踏会に参加する心のときめきは、「江戸の舞踏会」に典拠があるわけではない。言うまでもなく「典拠」は「戦争と平和」である。

「彼女を待ち受けているものが、あまりにもはなやかなものなので、彼女はそれが現実に来ることが信じられないほどだった。それほどそれは馬車の中のひんやりした、狭苦しい、薄暗い感じから遠かった。」（『戦争と平和』）芥川は、「そうだ。短編はそういう風に冒頭から読者をつりこまなければならぬ」（『文芸一般論』大正14年）というトルストイの言葉を引用して「アンナ・カレニナ」の冒頭の有名な一文を推奨している。「『戦争と平和』は古今に絶した長編であります。しかしあの恐ろしい感銘は見事な細部の描写を待たずに生じて来るものではありません。」（『文芸鑑賞』大正14年）と言って「戦争と平和」（第一巻第十八章）を部分的に引用している。

芥川が「舞踏会」（冒頭箇所）を「戦争と平和」（第二巻第三篇第十五章）を焼直して創作したことに対する自己確認を五年後になしたのが

「文芸一般論」「文芸鑑賞」であるかもしれない。

ピエール・ロチ「秋の日本」（『江戸の舞踏会』）は、鹿鳴館に招待された彼の一日の時間を追って漠然と記録した体験記録である。そこに記録されている明治18年11月3日の天長節、明治説は描かれた東京と共に美的な要素には欠けている。この荒削りの一日の行程を優雅な舞踏会の物語に仕立て上げたのは、作者芥川の文学的手腕である。以下、このことについて考察を進める。

（下）

芥川龍之介新辞典「翰林書房」（関口安義編）の「舞踏会」の解説（相馬正一執筆）によれば、後節「二」の前半部分は前節「一」の前に来て、後節「二」の後半部分は前節「一」の舞踏会の話の終わった後に付け加えるべきであると言う。確かに話の内容からするとそうなるが、それでは芥川龍之介「舞踏会」は、名作の条件を失い老婦人の思い出話になってしまう。前説「一」の華やかな舞踏会と後節「二」の老婦人の平凡な日常生活の対比によって作品「舞踏会」は、名作の地を占めているのである。このような作品構成上の手法を芥川は、早くアナトール・フランス「バルタザアル」（翻訳「新思潮」大正3年2月）「タイス」（大正三年七月）等の翻訳により身に付けていたのである。芥川の「藪の中」が映画「羅生門」として有名になった結果、米国映画「戦火の勇氣」、韓国映画「JSA」を生んだのと同じく芥川の初期作品の多くは、このアナトール・フランスの影響下にある。このアナトール・フランスの影響は、映画「アラビアのロレンス」でも顕著で「知恵の七柱」を著した一考古学者の交通事故による平凡な死から、突然舞台は第一次大戦中のトルコでアラビア人の独立運動を指導する若いイギリス陸軍の将校の話として展開するのである。

第一次大戦の英雄が戦火の中ではなくて、自宅近くの農道で自らの不注意による交通事故により死亡したことを三島由紀夫は、人生

のアイロニーを感じている。三島由紀夫「十日の菊」(「文学界」昭和36年12月)は、彼のこうした批判精神から生まれた。

前掲の相馬正一の「舞踏会」解説によれば、前節(一)は四段落に分けられる。この段落に沿って以下考察を進めていくことにする。第一段落、17歳の令嬢明子は、舞踏会の会場である鹿鳴館にやってくる。早くからフランス語と舞踏の教育を受けていた彼女にとって最初の晴れ舞台である。その美しさによって周囲の注目を浴びる彼女に見知らぬ仏蘭西の海軍士官が近づいてダンスを申し込む。

「舞踏会」冒頭については、すでに記述したように「戦争と平和」(「第二部第三篇第十五章」)に描かれた舞踏会の手法を芥川が借用して鹿鳴館の場に再現したとの指摘がある。相馬正一の「舞踏会」の解説「芥川龍之介新辞典」(「翰林書房」)も神田由美子「舞踏会」(「アプローチ芥川龍之介」明治書院)の解説も典拠は「比較文学論考」(「学友社」安田保雄)である。以下、「比較文学論考」に沿って「舞踏会」の作品構図を見ていくと、「明治19年11月3日の夜であった」という冒頭の一文により芥川が典拠にした「江戸の舞踏会」は、「日本印象記」(「高瀬俊郎訳」)である。「明治十九年の秋の末で、彼は其時短い口髭を生やして軽快な海軍の制服をつけた一青年士官であった。」(「日本印象記」解題)という解説が「舞踏会」の作品内部にそのまま取られているからである。

「客間は二階である。でわたしたちは、故国の秋の花壇では思いもよらぬ日本の菊の三重の籬、即ち白い籬、黄ろい籬、うす紅の籬でふちどられた、広い階段を通過してそこへ上ってゆく。」(「江戸の舞踏会」)

「幅の広い階段の両側には、ほとんど人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造っていた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまっ白な花びらを流蘇の如く乱しているのがあった。」(「舞踏会」)

舞台設定は、「江戸の舞踏会」に借りながら明子の容姿を「戦争と平和」に借りている。

「白い衣服の、黒い髪に同なじような薔薇を簪した二人の若い娘は」(「戦争と平和」第二巻第三章)

「初々しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髪に勾っているたった一輪の薔薇の花」(「舞踏会」)

「舞踏会」の典拠は、「江戸の舞踏会」「戦争と平和」であるが、細部には作者の繊細な気配りがある。明子の美しさに対して支那の大官が、呆れたような視線で彼女に見とれたことであり、若い燕尾服の日本人が振り返りながら無意識に白い襟飾りに手をやったことである。開化の日本の女の美しさを如何なく発揮した明子は、やがて仏蘭西の海軍将校の舞踏の申し込みを受けることになるのである。

「舞踏会」前節(一)「第一段落」の明子の描写は、明治初年の東京を記録した「江戸の舞踏会」からは生まれようのないもので、「戦争と平和」帝政ロシアのペテルブルグの舞踏会の再現である。不安に慄きながら馬車の中から東京の夜景に見入る明子、明るいガス灯によって照らされた鹿鳴館の幅の広い階段の両側には、大輪の菊の花が三重の籬を造り、その籬の尽きるあたりからは、幸福の吐息のように陽気な管弦楽の音楽が流れてくる。高まる十七歳の少女の不安は、周辺の人たちの驚きの視線によってやがて静かな落ち着きに変わっていく。彼女の落ち着きは、主催者の伯爵夫人の顔立ちに気づくだけの余裕を持つまでに落ち着きを取り戻すのである。水色や薔薇色の舞踏服を身に着けた同年輩の少女たちと歓談していると見知らぬ仏蘭西の海軍将校が近づいてきて彼女にダンスを申し込む。

開化日本の十七歳の少女の美を見事に描写することに成功した「第一段落」は、骨組みは「江戸の舞踏会」からそして女主人公の造形には「戦争と平和」を使って江戸の舞踏会をペテルブルグの舞踏会に再構成することに成功している。しかしそれだけではない、「第一段落」には、芥川の才知が閃いている。あるいは、当時の芥川の置かれた精神状況を

反映している。気分が沈みこむ軽い憂鬱の中に心ときめく華やかさがある。「美しい音楽的な短編小説」（『舞踏会』解説、三島由紀夫）と評価される所以である。

「第二段落」、明子は仏蘭西の海軍将校と共に「美しく青きダニウブ」のワルツを踊る。舞踏会に出席した人たちの注目を浴びることで興奮が鎮まり、不安から解き放たれる場面（『第一段落』）さらにこの仏蘭西の海軍将校と共に舞踏の喧騒の中で誇らしさと喜びを感じる場面、さらに相手の視線が自分の踊り靴に注がれるに連れて軽快に床の上を滑るように流れるようにダンスに興じる舞踏の名手としての女主人公の姿は、すべて「戦争と平和」のペテルブルグの舞踏会のそのままの再現であるという。（『舞踏会』神田由美子）

「相手の将校は、頬の日に焼けた、眼鼻立ちの鮮やかな、濃い口髭のある男であった」と芥川によって描かれた「舞踏会」のピエル・ロチは、後年「舞踏会」執筆の四年後に死んで芥川は追悼文を遺したが、「ピエル・ロチの死」（『時事新報』大正12年6月）で回想された作家としてよりもよほど立派である。この仏蘭西の海軍将校の容貌は、先に述べたように「日本印象記」（『高瀬俊郎訳』解説）から芥川が造形したものである。

「彼女の華奢な薔薇色の踊り靴は、物珍しそうな相手の視線が折々足もとへ落ちる度に、一層見軽く滑らかな床の上をすべって行くのであった」（『舞踏会』）

「縹子の舞踏靴につつまれた彼女の小さな足は、すばやく軽やかに、彼女とはかかわりなくステップをきざみ、顔は幸福の感動に輝いていた」（『戦争と平和』）

「ロチは偉い作家ではない。同時代の作家と比べたところが、余り背の高い方ではなさそうである。ロチは新しい感覚描写を与えた。或は新しい抒情詩を与えへた。しか

し新しい人生の見かたや新しい道徳は与えなかった。」（『ピエル・ロチの死』）

このような同時代人として芥川龍之介の評価を受けて、後の時代のピエル・ロチに対する文学的評価も芳しいものではなかった。

「紀行作品も含めてロチの異国物は、時代の推移とともに急速に色褪せていった。（中略）今日なお生命を保っているのは（中略）『氷島の漁夫』（八六）や『ラムンチョ』（九七）など、フランスを舞台にした作品のほうである。」（『新潮世界文学小辞典』芳賀徹）

「舞踏会」（『第二段落』）で明子を相手に優雅に舞踏に興じる仏蘭西海軍将校は、現実のピエル・ロチよりもさらには、芥川が認識していたピエル・ロチよりも立派である。早くから仏蘭西語と舞踏の教育を受けていた開化の日本を代表する十七歳の少女を相手に「美しく青きダニウブ」の曲に乗って軽快にワルツを踊る仏蘭西海軍将校は、ピエル・ロチからは遠く、さらには「戦争と平和」でナターシャをリードするアンドレイ公爵の姿からも遠い。独逸管弦楽の旋律の中で開化の日本の少女をリードする仏蘭西海軍将校は、「舞踏会」で芥川が創作した一つの理想である。明子が開化の日本を象徴する一つの美であるならば、明子を舞踏会でリードする仏蘭西海軍将校は、明治19年の日本が目指す理想である。

「皇室の語紋章を染め抜いた紫縮緬の幔幕や、爪を張った創龍が身をうねらせている支那の国旗の下には、花瓶花瓶の菊の花が、或は軽快な銀色を、或は陰鬱な金色を、人並みの間にちらつかせていた。」

皇室の紋章と並んで大支那の国旗がその存在を主張している下で菊の花が揺れているのは10年後に、日清戦争を控えた明治19年の小国日本の象徴であるかも知れない。花々しい独逸管弦楽の旋律に揺れる人波もその後の日本人の象徴かも知れない。

「こんな美しい令嬢も、やはり紙と竹との家の中に、人形の如く住んでいるのであろうか。」

仏蘭西語と舞踏に秀でた17歳の少女に対する仏蘭西海軍将校の疑問は、舞踏に興じる明子の胸に兆した疑問であり、こうした相手の疑問を肌で感じるほどに明子は、一層滑らかに身軽に床の上を滑っていくのである。

仏蘭西海軍将校が芥川の考えた理想であるなら、自己の華やかさ美しさを一時的なものであることを認識することなく軽やかに鹿鳴館の舞踏場を移動する明子は、開化日本の脆さの象徴であるかも知れない。

「第三段落」舞踏会の会場から二人は、腕を組んで階下の豪華なご馳走の並ぶ広い部屋に下りていく。「菊の花が埋め残した、部屋の一方の壁には、巧みな人工の葡萄蔓が青々とからみついている。」菊の花が象徴する開花の日本を一つの模造品、偽装された装いとして理解している芥川の作意が再び繰り返される。

海軍将校と明子は、共に一つのテーブルに着いてアイスクリムの匙を取る。やがて二人の間でやり取りされる社交上の会話は、「江戸の舞踏会」を完全に逸脱していて芥川の独断場の感がある。喧騒に満ちた舞踏会の席上で「開化の日本の少女の美を遺憾なく具へていた」明子に仏蘭西の海軍将校は、「舞踏会は何処でも同じ事です」と付け加えるのである。これは、一瞬に消えうせてしまわなくてはならない美に対する愛惜の念、「第四段落」の前哨戦のようなものである。「第三段落」の仏蘭西の海軍将校は幾分か、芥川が親しんだ実在のピエル・ロチの存在を感じさせている。

「訪れた各地の風物を、印象派ふうな繊細な筆致でよみがえらせながら、異国女性との多情多感な交渉を物語り、そこに作者生来の移ろいゆくものへの哀感を濃く漂わせて、独特の鮮麗な異国趣味文学をつくりあげていった。」（「新潮世界文学小辞典」芳賀徹）

明子と仏蘭西の海軍将校のテーブルを囲んでアイスクリームを食べながらの機知に富んだ会話のやり取りは、「江戸の舞踏会」「戦争と平和」を典拠にしたものではあるまい。芥川

の才知が生んだ無意識の会話の妙であるか、あるいは何かフランスの作家の作品から採り入れたかも知れない。後年「舞踏会」の典拠「江戸の舞踏会」について問い合わせを受けた時にワットウについて言及している。「僕のロティの本で面白く思ったのはあの日本人が皆ロココの服装をしてゐる事です。つまりあの舞踏会はワットウの匂いのある日本だったのでね。」（「神崎清宛書簡」大正14年11月13日）又三島由紀夫にも芥川龍之介の才能は、本質的にワットウ的な才能であったという批評がある。「時代と場所をまちがへて生まれてきたこのワットウには、本当のところ皮肉も冷笑も不似合だったのに、皮肉と冷笑の仮面をつけなければ世を渡れなかった。」（「舞踏会」解説、三島由紀夫）と続けている。

「明子はワットオを知らなかった。だから海軍将校の言葉が呼び起こした、美しい過去の幻も一ほの暗い森の噴水と凋れて行く薔薇との幻も、一瞬の後には名残りなく消え失せてしまわなければならなかった。」

仏蘭西の海軍将校は、明子を「ワットオの画の中の御姫様」のようだと呼んだが、その問題の「ワットオの画」に対して作者は、「ほの暗い森の噴水と凋れて行く薔薇との幻」という独特の解説を付け加えた。このときの「ワットオの絵」が具体的にどの絵を説明したものか、芥川がワットオの画集の中のどの絵を念頭において解説したか私には判らない。

「仏蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた」「開化の日本の少女の美を遺憾なく具」得ていた明子は、ワットオの名前を知らなかった。見知らぬ男女が知識を共有することは、何よりも親密さを増大させ絆を深める最良の方法であるが、明子は仏蘭西海軍将校との最初の会話に預くのである。開化の日本を象徴する聡明な明子は、「私も巴里の舞踏会へ参ってみとうございますわ。」と言う会話にすぎることになるが、巴里に対する憧れを口にすると少女に対して仏蘭西の海軍将校は、巴里への幻滅を口にすると。明子と仏蘭西海軍将校との



やり取りには、芥川の築地居留地に対す郷愁があり、又巴里に対して素朴な憧れを持ち得ない作者の横顔を感じさせる。

「第四段落」一時間の後に、明子と仏蘭西の海軍将校の二人は腕を組んで星月夜のパルコニーに出る。庭園の針葉樹には秋の気配が漂っているが、管弦楽の音や賑やかな話し声に混じって、美しい花火が針葉樹の上に上がるときには、人々のどよめきも聞こえてくる。

「赤と青との花火が、蜘蛛手に闇を弾きながら、將に消えようとする所であった。明子には何故かその花火が、殆ど悲しい気を起こさせる程それ程美しく思われた。」

舞踏会の喧騒と華やかな管弦楽の波に酔いながら明子は、「陽気な管弦楽の音が、抑へ難い幸福の吐息のように、休みなく溢れて来る」鹿鳴館の舞踏会の終息を予感し、「青春の只中に自然に洩れる死の溜息」（「三島由紀夫」）のようなひと時が、瞬時に失われる事への無意識の予感であろうか。「第四段落」において明子と仏蘭西の海軍将校とは奇しくも心を同じくするのである。

「私は花火の事を考へていたのです。我々の生のような花火の事を。」

「舞踏会」（「前節一」）の「第四段落」の終結部で明子と仏蘭西の海軍将校の二人の会話を両者の心の乖離を見出す従来の解釈は誤りである。舞踏会の喧騒と消え入る花火の美しさに漠然とした不安と寂しさを感じた明子に仏蘭西の海軍将校が、明確な回答を与えた場面として解釈すべきではないか。

「舞踏会」後節は、「明治11年11月3日」の鹿鳴館の舞踏会から30数年後「大正七年」

の秋の一日である。後年の明子は、鎌倉の別荘へ赴く途中面識のある青年小説家の持参の菊の花を見て過ぎし日の舞踏会の思い出を語る。

「その話が終わった時、青年はH老夫人に何気なくこう云う質問をした。（中略）するとH老夫人は思いがけない返事をした。」

「舞踏会」（二章）は、第五短編集「夜来の花」所収に際して「新潮」初出のときに比べて大幅に改稿されたことは有名でよく知られている。

『「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・フィオと仰有る方でございますよ。』

「舞踏会」後節は、華やかな「舞踏会」前節の思い出を収斂する形で、映画「舞踏会の手帳」のように若き日の精神と肉体とが共に高揚した一時を老年の静かな心で回想する形をとっている。この最後の一文の改稿について「ロチの名を聞いて青年作家は思いがけないことを知った愉快的興奮を感じる。しかし夫人は早く西洋文明の洗礼を受け、稀代の詩人との舞踏という貴重な体験を持ちながら、その意味を認識しえない。ついに西洋の文学とは無縁な俗人としての生涯に埋もれてしまった明子にとって、ロチとの一夜は、ただ一度打ち上げられた『花火』だったかもしれないのである。」（「近代文学大系38、芥川龍之介集」吉田精一注釈）と言う解説に従うべきである。

「舞踏会」は、アナトール・フランスの影響下に執筆された芥川龍之介作品の中で最も成功した短編小説であり作者の初恋の痛みが、時を経て生の形ではなくて生の不安の形を取って結実した名作である。